

破我品の偈について

飯 田 宏

『俱舍論』の第九章である「破我品」は、最後の章として位置しており、前八章と比べると、体裁や内容の点で趣の異なっている事項が多く、独特な性格をもっている。小稿ではそれらの中から、偈についての問題を考えてみたい。

「破我品」の偈は、AKBh・チベット訳・玄奘訳で、20偈を数えることが出来る。唯、真諦訳のみが24偈を有する。これは真諦訳が、他の三本での第八「定品」末尾の3偈を「破我品」に計上しており、しかも真諦訳は、他の三本での第一偈を欠き、また巻末に五言四句一偈と七言四句一偈とを余分に有しているが、以上の点を除けば、真諦訳と他の三本とは意味内容的にみると全くと言っていい程によく一致している。

「破我品」には従来、本頌 (kārika) がないとされていた。『俱舍論』の本頌は、玄奘訳とチベット訳とに伝わっており、その二本は共に第八「定品」で完結している。にも拘らず、Gokhale 氏の発表した梵文本頌のテキストは「破我品」に13の kārika を有している。それは前八章に存する kārika とは全く別な性格のもので、kārika と考えられるべきものではないのであるが、20偈の中から kārika として13の偈をなにゆえに抜き出したかを考えることは意義があると思う。

Gokhale 本 kārika との対応表

Gokhale 本	AKBh. チベット 訳	真諦訳
第 1 頌	第 7 偈	第 9 偈
" 2 "	" 9 "	" 11 "
" 3 "	" 10 "	" 12 "
" 4 "	" 11 "	" 13 "
" 5 "	" 12 "	" 14 "
" 6 "	" 13 "	" 15 "
" 7 "	" 14 "	" 16 "
" 8 "	" 15 "	" 17 "
" 9 "	" 16 "	" 18 "
" 10 "	" 17 "	" 19 "
" 11 "	" 18 "	" 21 "
" 12 "	" 19 "	" 22 "
" 13 "	" 20 "	" 24 "

まず『俱舍論』の註釈書類、Yasomitra; Puruvarthana; Samathadava; 普光・法宝・法幢・快道等のものをみてゆくと、偈の出現についての記述がある。それは以下の四種類のものに分類することが出来る。

- (1) 經典の引用とされるもの³⁾
 - (2) 世親以外の人の作とされるもの³⁾
 - (3) 世親自身の作とされるもの³⁾
 - (4) 何も言及されていないもの³⁾
- 以上の分類からみると Gokhale 本「破我品」の13の kārika は、(1)の經典の引用とされるもの以外のもの全部である。即ち(1)を全部排斥しているという特徴がある。

つきに、普光による「破我品」の科段に注目し、偈の分布を調べると Gokhale 本の13の kārika については次のような特色が

みられる。「破我品」の記述は、科段によれば、寶子部・數論師・勝論師に対するものが中心であり、それぞれの結論に相当するとみられる「通」難(通「外難」)に集中して10の *karika* が存在することである。「流通分」にも3つの *karika* が存する。これも結論部分であり、Gokhale 本の編集は「破我品」に説かれる思想内容を網要的に示そうとしたと考えられる。

またチベット大蔵経の中には、陳那作とされる『俱舍論』の綱要書がある。この書は、重要な部分を選び、抽出し要約・短縮するものである。しかし「破我品」については、そのような方法の他の品とは、多少方法が異なり、特に厳選された12個所についてのみ取り扱っている。これは陳那自身が為したものであり、彼の主観や興味が加味されているように、12個所の記述でもって「破我品」の内容の概要が知られるのである。「破我品」の偈は、そのうち Gokhale 本に採用された13偈のみが12個所の内、8個所にある。

以上述べたことをまとめると、Gokhale 本「破我品」の13の *karika* は「破我品」に存する20の偈の中から、中心的な個所の偈を巧みに選び集めているとみることが出来る。それは「破我品」に何等かの必要でもって *karika* が要求された時、この13の偈を選び出し、第九章の *karika* として「破我品」の内容を網要的に示そうとしたと考えられる。つまり『俱舍論』を理解するのに、*karika* によるのが便利であると考ええるような風潮が起り、Gokhale 本の編集者は「破我品」に説かれる思想内容を、ほぼ概観することが出来る13の偈を *karika* に擬して、編集したのであろう。恐らく、教育的な見地から、前八章のように *karika* だけの教科書的なものを要求され、そのために「破我品」にも *karika* が必要になったものと

破我品の偈について (飯 田)

も考えられる。編集者は不明であるが、その編集時期は世親が『俱舍論』を著わしてから、かなりの時代を経過した後、つまり世親が『俱舍論』を著わした時の伝説があまり重要視されなくなった頃から、12〜13世紀までのある時期に編集されたものであろう。

- 1 桜部建「破我品の研究」(『大谷大学研究年報』12号)参照。
- 2 福原亮厳監修『阿毘達磨俱舍論本頌の研究(界品・根品・世間品)』八頁、桜部、前掲論文参照。
- 3 V. V. Gokhale: *The Text of the Abhidharmakośakarika of Vasubandhu*, JBRAS Vol. 22, pp. 73~102. Rāhula Sampkhyāyana 氏のロベクシオンを校訂出版したもので、この写本は12〜13世紀に作られたものらしい。
- 4 『俱舍論稽古』巻下、大正六四・四六五b〜四六六a、等。
- 5 *Sphuṭārtha Abhidharmakośavyākya*, Wogihara ed., p. 708, 7. 15 (Kumarālatā), p. 714, 7. 21 (sthavira Rāhula), p. 719, 7. 20 (sthavira Rāhula), 『光記』巻三十、「経部中鳩摩羅多」(大正四一・四四五b)等。但し、すべての註釈書が一致して同名者をあげるとはかぎらない。
- 6 『光記』巻三十、「今論主復説三頌言」(大正四一・四四五b)。
- 7 Gokhale 本の第一頌 AKBh. チベット訳・玄奘訳の第七偈。
- 8 『光記』巻二十九、大正四一・四三八c以下。
- 9 Peking ed., No. 5596, Vol. 119. 桜部建「陳那に帰せられた俱舍論の一綱要書」(『東海仏教』2号)参照。

(仏教大学院)